

# 日本社会学の黎明

——西周のオランダ留学に纏わる一つの資料——

(解題) 大道安次郎

(翻訳) 山中良知

昨年(1962)の初夏から秋にかけて約3ヶ月、私は関西学院大学の外地留学規定によって、ヨーロッパ、カナダ、北米などに旅する機会に恵まれた。ワシントンで開かれた世界社会学会とアメリカ社会学会に出席すること、欧米の広域圏、ニュー・タウンなどの視察・研究することなどが、その主な目的であった。たまたまオランダのヘーグで約1ヶ月あまり滞在することができた。これはひとえにヘーグの Institute of Social Studies の副所長タイセ教授 Prof. Jac. P. Thijsse の好意によるものである。同教授は国土計画・都市計画ではオランダの最高峰であり、数年前の国連の阪神都市圏調査団のメンバーとしても再三日本にこられたことがある。私もこの調査団の日本側のメンバーの一人であったことが起縁となって爾来いろいろとご交誼を賜っている。はからずも同教授の本国でお世話になるようになったのである。なお同教授について附言しておきたいことは、日本のオランダ留学生の多くが同教授につねに親身に及ばないほどお世話になっており、同教授の学識と善意がオランダと日本とを結ぶ蔭の一つの橋架の役割を果しているということである。最近同教授の徳を慕って、同教授にお世話になった日本人の間で、日本とオランダに関する論文集を編んで同教授に献じようとする動きがあることも故なしとしない。

私がヘーグに滞在中、ロッテルダムの奇蹟的復興の秘密を探ったり、オランダの国土計画や都市計画を勉強したりしたが、エラスムスの偉大さをしみじみと現地で味ったり、レンブラントの数

々の作品に接することも忘れなかった。しかしライデン Leyden 大学を訪うことも一つの大切な目的としていた。というのは、日本の社会学史に大きな足跡を残した西周が、幕末にこの大学に留学していたからである。彼はこの大学で、津田真道と一緒に、フィセリング教授 Prof. S. Vissering について、日本人としてははじめて西欧の人文科学を勉強した。帰国後彼らが果した日本文化の近代化への寄与は極めて大きいことは周知の通りである。「日本の近代文化の建設者としての西周のはたした功績は、最近にいたって、次第にたかく評価されてきた。明治初期に新文化の指導者となった文化の偉人はその数もすくなくないが、おそらく学者としては何人もまづ西周に指をくっするであろう。新学術の開拓のみならず、儒学国学の素養もふかく、西洋百科の学問と東洋思想とを総合して独自の学問体系の樹立を試みたことは、まことに日本の近代文化史上の壮観であった。学問的な構想力のたくましさにおいて、西周以後これをつぎうる学者はきわめて少ない。」——これは「西周全集」の編者大久保利謙氏のその序における言葉であるが、全くその通りである。彼は日本文化の近代化に火をかかげたプロメトイユスであるといえよう。哲学への貢献についてはこれまでしばしば語られている。しかし日本の社会学の近代化にも彼は新しい光を投げかけたのである。彼はフィセリング教授からコントについても学び、それを日本に移植したのである。この点については、麻生義輝氏の「著作集」、「近世日本哲学史」のほかに、早瀬利雄博士の優れた研究があ

る。なお経済学については堀経夫博士の精密な研究がある。「明治経済学史」に収められている。

このような事情があるので、日本社会学会の会員であり、また明治社会学史研究にもひそかに心ひかれている私としては、ぜひともライデン大学を訪ひ、当時の西周をしのびたく思ったのである。幸に現在ライデン大学には日本にも再三こられたことがあり、日本女性と結婚されているフォス教授 Prof. F. Vos がおられるから、ぜひ同教授に会うようにとの蔵内教授のお奨めもあった。それでこのことをタイセ教授にお話したら、アポイントメントをとって頂き、わざわざ自動車を自ら馳って案内して下さった。

日本の柳川や倉敷を思わせるような街々の一角にライデン大学があった。同大学でフォス教授や助手にお会いして、当時の西周のことについて伺ったら、西・津田両氏は日本の幕府の留学生であったが、ライデン大学では正式に入学した学生でなく、いわばフィセリング教授の私的な教え子に過ぎなかったために、同大学には何らの正式な記録がないとの答えであった。

いろいろ話をしていたら、折角の希望には添えないかもしれないが、このような小冊子があるからといって示されたのが、ここで訳出紹介しようとしているものである。原文はもちろんオランダ語であって、「日本の天皇の王位昇叙」De Troonsbestijging van den Keiser van Japan と題されており、題名から判断すると私の狙ったところと全く無関係なように見えるが、その内容は私の願いをいく分でも充たしてくれるものがあつた。そのサブ・タイトルは「往時におけるオランダと日本の関係」(私の父の記録による 回想) と題されており、著者はフィセリング教授の子息で、オランダ銀行の総裁もされたことのある G. フィッセリング博士である。著者が同家に西・津田関係の書翰が残っていたので、それらを整理して、蘭領東印度・西印度の商業、農業、工業、鉱業の週間新聞「インド報道」46号(1928年11月14日)に掲載したのを、改めて小冊子としたのである。編集委員には教授 P. フェン・ロムブルク博士、教授 F. A. F. C. ウェント博士、H. C. プリンセン・ヘールリックス博士、教授 L. P. ド・ブッス

ィ博士の名が列らねられている。本文は19頁。

示された原本は手許に一部しかないというので、とくに請うて貸出して頂き、タイセ教授の厚意でマイクロ・フィルムにしてもらって、それを持ち帰った次第である。

私はオランダ語に全く弱いので、判読に困っていたところ、幸に本学部の山中良知助教授がオランダ語に極めて巧みであるので、敢えてその好意に甘えてここに訳出したわけである。山中助教授は、数年前にキリスト教哲学の研究のためにオランダに留学されており、本学部の開設とともに四国学院大学からお迎えした方である。

なおこの小冊子に盛られたものの中、極く一部ではあるが、すでにわが国でも訳出されている。1863年6月12日 Hofman 教授に宛てたものである。水田信利著「幕末に於ける我海軍と和蘭」(昭和4年)——大久保利謙著「日本の大学」昭和18年5月・170-171頁、板沢武雄著「日本とオランダ」昭和30年11月・165-167頁、板沢武雄著「日蘭文化交渉史の研究」昭和34年2月・374-376頁。西周全集第二巻解説 701-702頁。水田氏のそれはフィッセリング家文書からであり、板沢氏のそれは同氏がオランダ留学当時フィッセリング教授の子息 G. フィッセリングの好意によって、同家文書を日本公使館でタイプしてもらったものである。また西周自らがその一部を訳出している。

(西周全集第二巻所収の「五科学習関係文書」の項参照)

さらに附言しておきたいことは、西周全集第二巻の解説 703頁に「フィッセリング家には、西・津田の従学関係文書38通がある。これは板沢、岩生両教授が探訪し、本全集に利用することをえた。全文は本全集の別巻に収録する予定で、フィッセリングに関する解説もその際に譲る。」とあるところから、私がマイクロ・フィルムしたものも恐らくその中に含まれているかも知れない。もしそうであれば徒らに蛇足を加える恐れがあろうしかし現在の私には38通の内容は知るよしもないし、少しでも早く学界に発表することは、それだけ何らかのプラスになるのではなからうかと思つたから、敢えて公刊する次第である。幸に諒とされたい。

私はここで西周が何故にオランダに渡ったかの事情の若干について語っておきたい。西周研究の専門家にとっては蛇足かもしれないが、一般の方々には少しでもご参考になろうかと思ったからである。

彼がオランダの土を踏んだのは35才のときである。文久3年(1863)である。35才まで彼は何をしていたか、どうしてオランダに渡るようなことになったか。その間の事情を明らかにするためには、一応それまでの彼の生涯の歩みについて触れておく必要がある。

彼の伝記については森鷗外の「西周伝」(鷗外全集第七巻所収)に詳しい。いまさら私が云々すべきではなかろう。彼は文政12年2月3日(1828)石見国津和野森村堀内に津和野藩の藩医の家に生れた。幼にして才が抜群であつたらしい。四書五経、近思録、靖献遺言、蒙求、文選、左国史漢などを読み、筆札、詩賦を修め、能楽狂言をも嗜んだという。「暇居するときは好みて雑籍を閲し、家に蔵する所の野乗説部一も諳せざる所あらず」と伝記には記されている。(鷗外全集第七巻129頁)藩主の命によって、医をやめて儒者となる。嘉永元年(1898)彼の20才のときである。学問することはもとより彼の望むところであつたであろうが、藩主の意向は「唯道の要を得よ。古学宋学必ずしも問はず。然れども吾家世世宋学を宗とす。吾周が独りこれに戻ることを願はず」とあるように、彼をして宋学を修めさせようとするところであつた。しかし彼の志は宋学にはなかつた。藩命であるから彼は拒げてそれに従わざるをえなかつたのであろう。ここらあたりにも数年後の彼の「脱藩」事件の原因のひとつが潜んでいたのかも知れない。24才(嘉永5年、1852)のとき、培遠塾頭となり、授読教官署番を兼ねさせられた。それまでは養老館句読などの仕事をしていたのが、次第に昇進したのである。その間大阪や岡山などに遊学している。翌25才(嘉永6年、1853)江戸御留守詰時習堂講釈を命じられた。嘉永6年といえば、アメリカの艦が浦賀に入った年である。国情騒然として、幕末のあわただしい空気がただよっていた。この年に彼は江戸に上つたのである。日本の興奮の坩堝の中心地に身を置いたわけであ

る。「当時竝監米船の浦賀に入るを聞き、幕府の命を持たずして、藩士若干名を江戸に遣り、以て沿岸防禦の用に備えんと欲す。周の促さるるも亦これがためなり」と伝記にある。7月28日江戸に到着している。この年の冬から彼はオランダ語の勉強をはじめた。また算術の勉強もはじめた。「是歳冬周邸内の医野村春岱に就いて和蘭文典を読む。周の横文を攻むることここに始まる。又算術を桑本才次郎に受く。是歳鹽谷世弘を見る。」と伝記に記されている。ところが翌安政元年3月下旬に君父同僚に遺書して亡命し、嘗て大阪に学んだとき意気投合した中嶋玄覚の家に寓した。遺書の内容の大様は、「これまで非才にも拘らず一方ならぬ御世話になつたが、この際思い切り勉強したいので、お暇を願いたい。決して他意があるわけではなく、ひたすら勉強したいからである。もし学業成らば再び帰参して大恩の万分の一にも報いたい」という意味のことが記してあつた。しかしこれは文面に現われたものであつて、敢えて脱藩というような思い切つたことを仕出かすことの裏には並々ならぬ秘めた動機と決意があつた筈である。その間の消息を伝える一つのエピソードとも覚しきものを伝記はつぎのように語っている。「是より先き周玄覚鄰及び牧某等と往来して、好みて時事を談ず。この数士は皆前の松陰塾生なり。(大道註—これは大阪の塾であつて、いわゆる松下村塾(吉田松陰の塾)とは異なる。)周毎に謂えらく。余にして今より後身を立て道を行はんと欲せば、西学竟に闢くべからず。而して小藩に仕へ、瑣事のために役せらるるものは、縦令間を偷みてこれを講ずとも、恐らく精通熟達の期無からん。若かず、一旦君父と絶ちて、専心事に従はんにはと。」玄覚と鄰とはこれを可としたが、牧某は諫止頗るつとめたが、彼はついに意を決して邸を脱したのである。当時彼が松岡鄰に与えた手紙の一節に、「只思い切りて遣りて見て其上行かぬ時は、それなり死ぬと覚悟極め居候へども云々」とあるところから見ても、その覚悟のほどがうかがわれる。ところで彼の失踪を知り、遺言を見て同僚は驚き、ことに穩便にはこぶために、彼を一旦帰えらせて正式に暇を賜わつて去らしめようとする手段をとつた。同僚の友情の厚さの半

面、彼が同僚間に尊重されていたことをも示していよう。正式に暇を賜わり、友人に見送られて裏門を出て袂を分った後も、彼がなお朗々と詩を吟じていたとのことである。彼が同じく松岡郷に宛てた手紙に、「同僚は自分を大変丁重に取扱ってくれ、目付家老も至極気嫌はよかった。お前の犯法のことはよくよく重罪ではあるが、その志は実に哀憐に値すべきものがあるといわれた。このような次第で自分の責任はいよいよ重く、道は遠くして、蚊の山を負うようなものである。」という意味のことが書かれてある。

さてこのようにして彼は離藩したのである。地方の小藩から広々とした江戸の大洋に自由の身をおいた。閉ぢこめられた箱の中から飛びたった鳥のようなものである。しかしその鳥は何処に向って飛ぼうとしたのであろうか。これ以後の彼はかねての計画通り西学の研究に専念したのである。彼の運命の方向はここに大きく転回した。当時の模様を伝記はつぎのように伝えている。「是より周和蘭文典語法の部を大野藩士某氏泰助に、文法の部を郷人池田多仲に受け、旁ら和蘭砲術の書を読む。又雄蔵を介として杉田塾に通学し、次いで多仲を介として手塚律蔵（寿人）の塾に通学す。

（中略）才余にして周誠蔵と結びて蔵兄弟となる。

（中略）二年春猶玄覧の家に寓す。大名小路備前向屋敷井上仲の家和蘭の春を蔵す。鄰將に郷に帰らんとする時、周に托してこれを謄写せしむ。周日ごとに糧を裹みて行き、巻ごとに二本を写し、其一を郷に送り、其一を留めて自ら読む。鄰金を餽りて報となし、兼ねて周が衣食の資を助く。九月神田西紺屋町栗山弘道の家に移る。（弘道は浦賀の人、医を業とす。和蘭の書を読まんと欲して果さず。）」「十一月鄰寿人の塾に來り学ぶ。周も亦塾僕となりて往く。共に前に写す所の書を講ず。（中略）三年始めて英吉利語を学ぶ。寿人の慾慥に従ふなり。塾に蘭英対訳辞書ありて借り用ゐることを得たり。冬英吉利発音法を中浜万次郎に受く。」（「西周伝」137-138頁）海綿が水を吸うように、彼はオランダ語を学び、また英語を学んだのである。そしてその視野を地方の小藩から国全体に、さらに世界的規模にまで拡げていった。そしてそれが彼を蕃書調所と結びつけ、彼の資質

を益々伸ばすようになったのである。

蕃書調所は安政3年(1857)設立の運びとなり、翌年正月開校した。蕃書調所が如何なる使命をもって設立されたか、その組織はどうであったかなどについては、大久保利謙氏の「日本の大学」(昭和18年創元社版)その他に詳しく、すでに周知のことである。幕末における幕府の洋学の最高の学問所であった。彼は英語の心得があるというので調所に迎えられたのである。開校と同時に彼は津田真道と浅井勇三郎(大井尚吉)とともに蕃書調所教授手伝並として任用された。彼が任用されたのは、調所で英語を読むものを求めているのを耳にした寿人が、彼を推したからである。ところで、任用に際して、何らかの藩籍にあることが必要であったが、彼はすでに離藩しているので、一応さきの津和野藩籍に復帰することを望んだが果さず、止むなく寿人の義弟となり、佐波銀次郎厄介と名のり、佐倉藩主堀田正篤の臣として任用された。ところで津田真道らとともに任用されたことが、それ以後の二人の深い関係のはじまりであることも、彼の生涯にとって極めて大切な運命的な事件として記しておかねばならない。寿人の変らざる友情、津田との交遊のはじまりのほかに、彼の示した友人細川潤への友情も一つのエピソードとして伝えられている。細川を調所の教職に就かしめるよう調所頭取古賀謹一郎に推したが、細川が藩用のため帰国しなければならないために果さなかった。しかし細川は西らの友誼の厚きを感謝している。

さて調所に入った彼は、その年の10月に書を徳川慶喜に上って北海道開拓のことについて進言している。世界の動勢を説き、列強の動きを説明し、今にして北海道の開拓に正しい手を打たなければ、植民地になってしまうと説き、その具体策をも進言している。この上書は顧られなかったが、かなり長文の文書で彼の目がすでに世界的レベルに注がれていたことを示すとともに、憂国の情切々たるものがうかがわれる。

翌年の春には津田と調所の長屋に移り住み、その夏には神奈川に行って清英条約を訳し、秋にコレラを病んでいる。翌安政6年(1859)のはじめ本所林町松阪某邸に居を移し、3月石川ます子と

結婚した。彼の31才のときであり、寿人、玄覚が婚を主り、稲田某が媒をなしている。

この頃から彼は幕府の海外留学生になろうとして、その機をうかがっていた。さきに私は津田と一緒に調所に入ったことが、彼の生涯にとって極めて重大な運命的方向を決定したといったが、彼は津田と謀ってこの計画実現を期したのである。このことについて彼はつぎのように語っている。「五月（安政6年）に調所教授手伝たるべき仰をば蒙りにき。此時同じ仰蒙りける中に、彼行彦（大道注一津田のこと）ぞありける。この人は美作国津山の人なりけるが、余と同庚にて、学の道にはいと敏く、蟹文学の学のみかは、漢学倭学にも深かりし程に、花眺むる朝、月見る夕ごとに、いと深くぞ睦び交らひける。その頃行彦も余も、未だ妻さだめせず、定れる宿もあらねば、偕に調所の館の長屋に住みて、文読みけり。余等二人の留学生たらんと思ひ起ししは、我国と亜米利加合衆国との間に条約定められて、彼国へ御使遣さるる事となり、水野筑後守、永井玄蕃頭、津田近江守の三人その御使の仰蒙りし時なりき。行彦はそのかみ玄蕃頭の子某に洋書を授けつることありて、玄蕃頭に名を知られ、余も神奈川にて翻訳の事勤めける時一面の識あれば、相議りて此事頼み聞えばやと、玄蕃頭の宅に至りて謁せんと乞ひぬ。云々。」（「西周伝」149頁）このようにして彼ら二人はまず知己を求めてアメリカに留学しようと試みたのである。玄蕃頭は好意的にことを運んだが、その後幕府の方針が変わり、御使が他の人となったために、ついに彼らの希望は実現されなかった。

しかし彼らは希望を棄てず、その機をうかがっていたところ、その翌々年（文久元年、1861）、また欧米六国に御使遣の議が起り、竹内下野守等がゆくことになった。そこで西・津田の二人はこの機会を逸してはと、人を介して下野守に会って彼らの意のあるところを塑えた。その時彼は「承美私言」という一篇の文を作って下野守に呈している。津田も文二篇ばかり著している。「承美私言」の内容は、わが国には昔から遣唐使のような留学生の制度があって、外国で政治の学などを学び伝えた人達を左右の顧問に備えたことなどを説明

し、留学生が如何に国家の政治に大切であるかの利害得失を説いたものである。下野守は彼らの請ひは尤もであるが、そのようなことを希望する者が多数あるので無理ではなからうかと答えた。また古賀殿に調所を通して願い出たが、すでに別に定まっているからと断わられた。さらに御目附浅野伊賀守が調所の掛役となったので、人伝に、また直接に会って、留学のことを依頼した。伊賀守は「承美私言」のことも知っていたし、好意的に奔走してくれたが、御使に具する人数が余りに多くなって、船が狭いので人数が省かれるほどであるから無理だということになった。

このように彼らはいろいろ手を尽したが、容易にその希望は実らなかつた。彼らの焦慮思ふべしである。「余等以為へらく。斯くては年ごろの望も絶えや果つべき。又折もありなんとと思ふものから、徒に月日を過して、真白なる頭打ち振りては、争でかいと遙なる旅をばなし遂ぐべきなど思ひぬ。」と彼は当時の心境を記している。（「西周伝」150頁）

たまたま幸運が訪れてきた。それは軍艦二隻の建造をアメリカ合衆国に注文した序に、造船の技術を習う人々をも遣わすということになって、その人選を海軍操練所に任かした。伊賀守はさきの彼らの希望を想い出して、蕃書調所からも派遣するようにと進言した。調所の掛役となり、外国奉行にもなった久保越中守が津田らの希望を知っていたので、伊賀守の詞に添えて、二人のために奔走した。その結果、11月21日安藤対馬守の名において、調所に対して、西と津田とをアメリカでの軍艦建造の竣功のときまで、学術研究のため派遣すると申渡した。このようにして彼ら二人の渡米は正式に決定したのである。彼らは喜び勇んでその準備をしていた。ところがこれも中止になった。というのは、南北戦争が勃発し、北軍がイギリス汽船に乗っていた南部の事務官を捕えたことから、北軍とイギリスとの間に葛藤が起ったので、他国の軍艦の建造どころではなくなったという理由のもとに、ついに日本の軍艦建造は中止となった。このことを西は「これぞ余等二人の思ひ立ちぬることの最後の障碍にはありける」と記している。（「西周伝」151頁）

しかしこれは最後の障碍であって、その障碍も除かれてついに彼らの希望は実現した。アメリカでの軍艦建造が駄目になったので、オランダで建造することになり、彼ら二人もその行に参加することになったからである。「六月十一日（文久二年、1862）余等を御軍艦操練所に召され、御軍艦奉所井上信濃守申し聞されけるは、こたび御暇を賜ひ、学業のために和蘭へ遣さるるに就きて、路銀十両下し給はる旨、脇坂中務大輔仰せ渡さるとなり。」と「西周伝」（151頁）に記している。ついに彼らの積年の希望が達せられたのである。

当時の彼の懐抱の一端を、友人の鄰に宛てた手紙の一節からうかがってみよう。（「西周伝」152頁）「都市にては西洋学頗る流行申内、彼の水府流の尊王攘夷の説浸潤尤深、頑固難化者故、毎時浪士の騒動有之、政府にても御苦心被為在候儀と奉有候。頃者長州家老京師へ登り、又嶋津氏浪華之一件杯、御近辺之事故、定て逐一御承知と奉有候。何分当今にては、外国の事よりも内輪の騒動可患、逐に愛親覚羅氏之覆轍を踏候眞真之に非ざる様相見候も、一は朝廷の国是未だ定まらざると、一は此徒之暗於知彼知己、漫唱神州皇国、自尊大蔑視他邦より起可申哉と奉有候。小生頃来西洋の性理之学又経済之学杯の一端を窺候処、実に可驚公平正大の論にて、従来所学演説とは頗る趣を異にし候所も有之哉と相覚申候。尤彼の耶蘇教杯は、今西洋一般の所奉に有之候へども、毛の生えたる仏法にて、卑陋の極取るべきこと無之と相覚申候。只「フィロソフィア」（philosophia）之学にて、性命之理を説くは程朱にも軼ぎ、公順自然之道に本づき経済之大本を建てたるは所謂王政にも勝り、合衆国英吉利美之制度文物は彼堯舜官天下之意と周召制典之心とにも超えたりと相覚申候。実に由斯道而行斯政、国何不富、兵何不強、人民何聊生、祺福何不可求、學術百技何不尽精微と奉有候。（これは文久2年5月15日に書いて、6月2日に出した手紙の一節で、末尾に西周助魚比等と署名している。「西周伝」152頁。）

かくして彼らはいよいよ待望の海外留学生としてオランダに渡るのである。文久二年（1862）6月。彼の34才のときである。品川沖から軍艦咸臨丸に乗船。オランダ留学生は内田恒次郎、榎本武

揚など5人の海軍操練所の人達（彼らは造船その他の技術を学ぶため）と水夫頭、船大工、鍛冶、鑄工、測量師、水夫、医師など、それに西・津田とを加えて一行15人で、内田が一行の取締であった。咸臨丸の士官以下舵工合せて約100人だったので、艦が狭く、そのために西と津田らは僕隸舵工と共に起臥したとのことである。浦賀では風に阻てられて泊ること数日、漸く下田に着いたら、船内に麻疹が流行し、8月2日までそこにとどまり、3日夜半漸く志摩国的矢浦に至り、9日そこを発して、12日夕兵庫につく。13日兵庫を発し、長崎に着いたのは23日であった。江戸から長崎まで、途中でいろいろな事件で阻げられたといえ、2ヶ月以上も費したことになる。当時の交通の困難さが思いやられる。

長崎でオランダの風帆商船 Kallippus 号に乗船し、9月11日（1862）午後1時出港した。当時の風帆船だから遅々として進まず、12日間もかかって台湾沖を通過しているほどである。ところが10月6日の未明に Bangka と Billiton との間 Liar 嶋近くの Gaspar 海峡で船が坐礁してしまった。附近には馬來種の土人が住んでいたのいろいろな困難なことに会ったが、漸くオランダ出先官辺との連絡をえて Batavia に至り、11月2日オランダ船 Ternate 号に乗ることができた。乱暴な土人に会ったり、初めて見る回教の風習に接したり、酋長たちに出たりしていろいろ珍らしいことを見聞している。「周夜冷を懼れて、酋長が家の戸傍に宿せんと欲す。老婦の年四十許なるありて、出でて拒みつ。始めて其面を覩ることを得たり。（回教なので、土俗婦女容を覩ることなく、また戸外に出ないのである。大道注）嶋民皆檳榔子を噛む。齒黒く唇紅なり。又膚に塗り食を調ふるに、皆椰子油を用る、其臭鼻を撲つ。尊長食を遭難者に給す。鶏を割き魚を煮る、ほぼ洋饌に類すと雖も、猶其油臭を嫌ふと彼は語っている。

（「西周伝」158頁）Batavia では総督に謁したり、いろいろな施設を見たり、食事もよかったりしたので漸く蘇生の思いがしたらしい。彼もまた熱病にかかったが数日で治った。かくして漸く11月2日 Ternate 号に乗船の運びとなったのである。この船はさきの Kallippus 号と比べて倍の

大きさがあったので、何かと快適だったらしい。翌年の6月16日の夜 Brouwrs Lagen に着き、18日 Rotterdam から汽車で Leyden に到達し、漸く Breedtestraat の Hotel de Zon に泊ることができた。船中ではオランダ語を内田に教え、彼から算術を教わったり、また微恙にかかったりしている。途中喜望峰に沿うて、大西洋に入り、セント・ヘレナを訪ひ、ナポレオンの跡をしのんだり、日蝕や月蝕に会ったりしている。

このようにして彼は漸く目的地のオランダのライデンに着いたのである。江戸を出てから約1ケ年間の長い月日を要したわけである。途中風浪にもまれ、難破したり、病気になるたりして、大変な苦労を重ねたわけである。現在の設備のゆきとどいた豪華な客船、一日でゆける飛行機の旅などと比べると、想像に絶する隔りがある。当時としては水盃で別れを惜しむということもあながち不自然ではなかったといえよう。

ライデンでは彼ら二人は Breedtestraat の Hotel de Zon に泊ったあと、同じ街の Oudendorp 氏の家に寓して、オランダ語を Van Dyck について3ヶ月ほど学び、8月下旬(10月上旬)に政事学諸科をライデン大学教授フィッセリング博士について学び、元治六年(1864)には Rijn 河上の縫医某の家に移り、学を終えて慶応六年10月14日(1865. 12. 1)に二人はライデンを出発し、12月28日(1866. 2. 13)無事江戸に帰った。彼の37才のときである。帰国後の彼の活躍については周知のこととて省くことにする。(今にして甚か残念に思うことは、切角ライデンを訪れながら、Breedtestraat の Hotel de Zon の跡や Oudendorp 氏邸の跡などを探ぐらなかったことである。後日の好機を期するほかはない。)

彼らがどのようにしてフィッセリング教授の教をうけるようになったか、そして彼らの抱負、さらに実際にどのような学科が教えられたかなどについては、彼の手記の記五科授業之略、五科口訳紀略、現法万国公法国法制産学政表口訳、五科学習に関するフィッセリングの覚書(何れも「西周全集」第二巻五科学習関係文書の項に収められている)などからうかがわれる。私がマイクロ・フィルムにし

て持ち帰ったものは、側面からではあるが、この間の消息をいくらかでも補ない伝えるものがあるう。

さきにも見たように、この小冊子は「日本の天皇の王位昇叙」と題され、副題は「往時におけるオランダと日本の関係」(私の父の記録による回想)となっている。本文が19頁で、表紙のほかに写真が数葉収められている。内容をごく簡単に紹介してみたい。

まずはじめに著者は西・津田両氏がどのような事情でオランダに留学したかについて簡単に述べ、フィッセリング教授に教えられるようになるプロセスを叙している。西・津田の二人はライデン大学で日本語・中国語を教えていたホフマン教授宛に彼らの願いを手紙で出した。彼らの手紙を受けとったホフマン教授は、早速フィッセリング教授に彼らの願いを告げ、ここにホフマン教授を介して、彼らとフィッセリング教授との「美しい関係」がはじまるのである。その間に往復された彼ら四人と内田恒次郎(オランダ分遣隊長)の手紙が、この小冊子に収められている。つぎのようなものである。

1863. 6. 7付 フィッセリング教授よりホフマン教授宛  
(これは二人の日本人を迎えることについての打合せ)
1863. 6. 14付 西・津田よりフィッセリング教授宛  
(面接依頼)
1863. 6. 16付 フィッセリング教授よりホフマン教授宛  
(西・津田に業を授けることについての覚書)
1863. 6. 15付 西より「関係者」宛  
(西が「テルナーテ」船上で書いたもので、彼らのオランダ訪問の理由、研究領域などについての希望を述べたもの)
1863. 10. 31付 フィッセリング教授よりホフマン教授宛  
(西・津田二人に会いたいという依頼)

1863. 11. 16付 西・津田よりフィセリング教授宛  
 (ヘーグの大祭典にとらわれずに、授業を受けたいと希望を述べたもの)
1865. 11. 27付 津田よりフィセリング教授宛  
 (業を卒えて、帰国に先立って、お袂れの感謝の挨拶)
1865. 11. 28付 フィセリング教授より西・津田宛  
 (お袂れの手紙)
1866. 2. 6付 西よりフィセリング教授宛  
 (帰国後の挨拶)
1866. 3. 9付 津田よりフィセリング教授宛  
 (帰国後の挨拶)
1866. 9. 29付 内田よりホフマン教授宛  
 (日本政府の名においてフィセリング教授に対する謝礼について)
1866. 10. 2付 ホフマン教授よりフィセリング教授宛  
 (日本政府の謝礼について、内田の手紙同封)
1866. 10. 18付 フィセリング教授よりホフマン教授宛  
 (その返事)
1866. 10. 22付 内田よりフィセリング教授宛  
 (謝意を現わすための面会の申出)
1866. 10. 23付 フィセリング教授より内田宛  
 (その返事)
1866. 11. 5付 ホフマン教授よりフィセリング教授宛  
 (内田・フィセリング教授の往復書翰を見ての返事)

以上のような書翰が収められているが、これらの書翰の間に、著者の説明的な言葉を若干挿入している。

小冊子の終りに、結びとして、帰国後、内田分遣隊員の復本、赤松が軍人として立派な仕事をしたこと、西・津田も日本文化の近代化に指導的役割を果たしたことを述べ、彼らがこのような寄与を

なしたことの背後にはオランダの日本に対する友情も一役買っていたことなどについて言及し、時あたかも大正天皇の御即位式に際しているの、御即位式に対する祝賀の言葉を述べ、日蘭関係の友情がますます深くなることを望み、日本の将来の繁栄を祈願して、この小冊子を終えている。(この小冊子が書かれたのは、アムステルダムで1828. 11. 5であった。)

この解題ならぬ解題を終るに先だって、一、二附言しておきたいことがある。

その一。 彼がオランダに渡ったのは、ある意味からいえば、偶然的なチャンスであった。あのような優れた才能と資質の持主であるから、いずれはどこかに留学生として派遣されたであろうが、オランダに派遣されたことは、彼を通してその後の日本文化の近代化にヨーロッパ大陸的な影響を強く与えたといえないことはなかりう。もし彼が最初の希望のようにアメリカに派遣されたならば、彼自身の思想やその文化的役割がかなり変わっていたであろうし、ひいては日本文化の近代化にも別な調子が附与されたかも知れない。偶然的なチャンスが、その個人にも、その国の文化にもかなり大きな影響を与えることがあるのをつくづく思わざるをえない。私はここで図らずも、フランスの A. コントも若い日にアメリカに渡る夢を抱いたこと、それが実現しなかったこと、もし彼が若い日にアメリカに渡っていたならば、現に私達の前に現われた後の日のコントとは異ったコントとなっていたであろうことなどを想起した。(拙著「アメリカ社会学の源流」17-21頁。) だからもし彼がアメリカに渡っていたならば、社会学の師祖としてのコントとならなかつたかも知れない。とすると社会学史もいまとは少し異つたものになっていたかもしれない。私は運命のいたずらというか、偶然的ともいえるチャンスが意外なところで大きく作用するものであることを、西周やコントなどの例からもうかがうのである。

その二。 今日いわゆる「文化の交流」はかなり門戸が広く拡がっている。しかし古代中世はもちろんのこと、幕末や明治の初めは極めて狭い門であった。その狭い門をくぐって「文化交流」



と、先進国の文化を移植する役割を果たしたのはごく限られた人々であり、しかも資質と天分に恵まれた少数の人達によってなされたのである。遠くは聖徳太子の偉業、絢爛と咲いた天平の文化の背後には遣唐使や朝鮮の人々がいたことを想い浮かべるし、明治文化の近代化の背後には、西・福沢その他限られた人々の先進国文化の批判的摂取があったことを想起する必要があるだろう。もちろんそれらを受容するだけの社会的文化的地盤がすでに成熟していたことはいふまでもない。それにしても現代の日本は「文化交流」の窓は広く拡げられており、年々極めて多数の人々が海外文化の交流と摂取する機会に恵まれている。このようなよい機会をよりよく生かしたいものである。

その三。 さきにむかしの海外への派遣はごく限られた人達であるといったが、同時にその旅の途中の困難も想像以上のものがある。西の場合、今日なれば飛行機では一日でゆけるのを約1ヶ年もかかっている。もちろんこれは途中で道草を食

ったこともあるが、時間的な差は極めて大きい。その上に途中の困難さも非常なものがある。西の場合も遭難しているが、いにしへの遣唐使の場合も、往路でも帰路でも多くの犠牲者を出している。井上靖の小説「天平の薨」はそのことをよく現わしている。天平時代に律宗を築きあげた唐提寺の鑑真和尚が航海の途中で失明するほど苦労したことなども心して想起すべきである。

その四。 それにしても明治時代の日本があれだけ急速に躍進できたことの背後には、先進国の並々ならぬ協力と彼らの優れた文化を移植した明治の先覚者達の英知と指導者によるしきを得たことにあったこと、これを本稿のテーマに関連させていえば、オランダの温い協力と支援があったこと、西・津田両氏などの英知のあったことを、日本の明治社会学史の一学究として、感謝と謙虚な気持ちをもって、銘記しておきたい。

(1963. 4. 21 紅葉谷にて)

# 日本の天皇の王位昇叙

往時におけるオランダと日本の関係

(私の父の記録による回想)

博士 G. イッセリング著

蘭領東印度、西印度における商業、農業、産業、鉱業の週間新聞46号(1928年11月14日)“インド報導”からの転載、編輯委員は、博士 P. ファン、ロムブルク教授、博士 F. A. F. C. ウェント教授、H. C. プリンセンヘールリックス博士、博士 L. P. ドブススイ教授である。オランダまた蘭領印度における価額18ギルダー、外国20ギルダー。印刷、出版と発行者はアムステルダム J. H. ドブススイ。

# 日本の天皇の王位昇叙

往時におけるオランダと日本の関係

(私の父の記録による回想)

山中良知 記

1862年度において、日本帝国海軍省と日本駐在のオランダ総領事との間に、オランダでの日本戦艦建造について契約がなされた。この問題が日本政府の決定にまで至ったのは、はじめて外国で船艦を建造し、とくにオランダの造船工場に指命をあたえるためであった。オランダは、鎖国時代に日本と親交関係を相互に保持した唯一の国であったからである。

日本政府は、オランダへ海軍将校の派遣隊を送ることに決定した。それは建造とそこで海軍方面の研究をするためであった。この派遣隊は上級将校である内田恒次郎という人の指揮の許にあった。

その上、海軍派遣の際、二人の著名な日本人の参加が決定された。この人達は、すでに教師として洋書調所の関係をもっていた。すなわち、学者の身分として教育されたこの二人が、派遣隊の加入を宣告されたのは、望ましいことであった。それはオランダで政治学、とくに国法、経済学の教育を努めて受けるためであった。この二人というのは、津田真一郎と西周助である。彼らは、のちに津田真道、西周といったのである。

J. ホフマン氏は当時ライデン大学で日本語、支那語の教授であった。それで先ず第一に二人は、当然ホフマン教授の助力で政治学に必要な教育のための教師を求めたのである。ホフマン教授は、それで当時ライデン大学で経済学、統計学や、さらに課外講義の方法で外交史を教授していた私の父、S. フィッセリング博士にそのことを依頼した。

一方日本人と他方私の父との間に自由に始めら

れた交通は、その際ホフマン教授の仲介となったのであるが、ヨーロッパの大学で二人の日本人が学問教育を仕上げるための、はじめての試みについて興味ある報告を示している。日本人やホフマン教授の書翰については、数多のものが保存されている。私の父の書翰については、自筆による控えが書類のうちにある。

私は報告の要旨をさらに広げるためにここで出来るだけ異った人物を手紙の言葉でもってのせよう。

その日本人たちは、オランダへの旅ではすでにいくらかのオランダ語を習っていて、彼らの側でもオランダ語で交通をしたのである。私がここでその手紙にある誤りをもそのままにして文字通りに再録したのであるが、その日本人の手紙から、彼らはオランダ語になお骨折っていたことが明らかである。ライデンでは、彼らはオランダ語の学習にホフマン教授や、その当時に小学校の著明な校長であり、一流の人物として、一般には「ファン・ディク先生」として知られていた人によって助けられた。

初信は、その時 S. フィッセリング博士からホフマン教授にあてた手紙であった。1863年6月7日の日付で次の様に記されている。

謹啓

貴方の日本人学生の無事到着をお祝い申し上げます。その方々の長い旅路が心配の種となりはじめたところでした。

この青年達について少し前にもっていた論議に

ついて、私は貴方に次のことを報告しなければならぬと思います。私は今月下旬ライデンに行き、夏期休暇を田舎ですごそうと考えております。若し貴方がそのまゝに、なお一度私のところに話しに来られる必要がございましたら、或はそれがご希望でしたら、私はよろこんでお報せをうけます。

1863年6月7日

敬具

S.フィッセリング

その間に二人の日本人の学者がライデンに到着した。そして1863年6月14日の日付で、彼らはフィッセリング教授に第一信を出したのである。

1863年6月14日ライデン

謹啓 S. イッセリング教授殿

貴方に敬意を表すために、貴方を訪問する名誉とご高配にあずかる特権を求めなければなりません。私共は空しくも長い間経済学を学ぶことに心をかたむけていましたが、今まで斯学に関して二三の著書すら読むことが出来ませんでした。

そのために貴方のご令名は貴方に拝眉したいことで私共の心を引きよせています。そして私共は貴方の教育に従いたく存じています。

いつご尊堂に拝眉する機会があるでせうか。

敬具

津田真一郎

西 周助

フィッセリング教授は、すでに二三日のち教科課程を効果的にあたえるためにプログラムを立て、そしてホフマン教授にそのプログラムを下記のように提出した。

津田真一郎氏と西周助氏に教育を授けることについての覚書

津田真一郎と西周助遊学の目的と彼ら自身の希望に対する最善の答えは政治学原理の教育をあたることであると思います。

此れに次のことがふくまれています。

1. 自然法学

2. 国際公法
3. 国法学
4. 経済学
5. 統計学

この理説の要旨を認識するために、この五つの専門科目の根本原理が、この兩人に出来るだけ簡明に知らされねばなりません。

この教育は、ほぼ二年間のうちになされるように、整えられねばなりません。その前に必要なことは、両氏が原則としてオランダ語で教育され、その結果オランダ語をよく理解し、明瞭にまた容易に話し得ることです。

私が政治学の教授を担当するにあたり、今年の十月か十一月に始めることが出来ると思います。私はその場合、大学の休暇期をのぞく外は、週二晩を忠実にこれにあてる積りです。

若し私の望む成果があらわれないことを認める場合とか又他の理由で中止するように私を納得さず場合、私がいつでも教育を中止出来るように留保しておかねばなりません。

両氏の授業の場所として私の家をこれにあてます。

以上の諸点について同意されるか或は一般的決定事項としてさらに整えることがのぞましい他の条項があるかどうか私はききたく思います。

1863年6月16日

S・フィッセリング教授

このプログラムはただちに日本語に訳された。一方内田分遣隊長は、日本政府へこの翻訳書送付の労をとったのである。

一方また西氏は、すでに舟旅にさいし、自分のために一種の覚書をとのえて、それにオランダ渡航目的を詳しく説明し、彼と津田氏がもともと学習したい事柄が報せられたのである。ホフマン神学博士の1863年6月15日付添書と共に、次の詳細な文書が S.フィッセリング教授におくられた。

これは「関係者殿へ」という簡単な宛名に対して認められている。それは、西氏が「テルナーテ」船の甲板上でこの文書を認めた折には、彼が希望する教育をうけるために、誰に宛名をかいてよいか知らなかったからである。この文書の内

容は下記のようなものである。

「写し」

関係者の方へ

私儀

謹んで下記のことを報告いたします。

前年中にわが海軍当局と在日和蘭領事との間の交渉によって、オランダで一隻の船を建造することと、そのために我が海軍将校をそちらに派遣することが決定されました。

同時にヨーロッパの学問を研究するわが洋書調所では、我々二人も洋書調所から海軍派遣隊長の一人である内田恒次郎の許に随行することが決定されました。

この遊学の意図は次のようであります。久しくわが帝国はオランダを除く凡てのヨーロッパの列強と交通をもちませんでした。だがそこで事情が進捗して、わが帝国とヨーロッパ列強との友好関係が成立したので、わが政府は七年このかた二三の列強と友好条約をもつに到ったのであります。

外交ならびに貿易の交流が増してくるにつれて異った関係が成立するので、日本国のために次のことが必要となります。つまりヨーロッパの学芸が習得され、またそのことのために江戸で帝立の学校が設立され、その学校の教師が諸藩から選ばれ、そこで様々な学問が教育されています。

だがなお多くの欠陥がありましたのは、諸学校の整備、教授方法が技術、学問と共に二三の僅かな技術を除いては知られていないし、その学問も物理学、数学、化学、植物学、地理学、歴史学、それに四ヶ国語——オランダ語、高地ドイツ語、英語、仏語、これもただ読むだけである——の方面の部門は僅かな光を示しているにすぎないからであります。さらにヨーロッパ列強との交渉とか、多くの国事や施設の改善に欠くべからざる有益な学問があって、これらは統計学、法律学、経済学、政治学、外交術の領域内で求められなければなりません。しかしこれらの部門は、日本では全然知られていません。

それ故、私共の意図するところは、凡ての学問を習得することでありませぬ。しかし一つの難事であるとみとめられることは、ただ二三年の滞在の

間にかくも多く、重要な学科を凡て習得することは不可能であるということです。私の意図は、そのためにこれらの学問を逐条的に順序だてて学ぶのではなくして簡易なことを習得することでありませぬ。今後なされる二回目の派遣で、凡ての学問を習得することが若い学徒においてなされ得るでしょう。私が貴方に求むることは、以上のべたことが理解されまして、私のため一人の良き師が選ばれることでもあります。

時間の許す限り、フランス語を習いたく思います。それは凡ての学問に偉大な役割をなしているからです。しかし、私共の場合においては、フランス語を話すことは、さらに困難であります。はすでに英語を勉強しましたが、私は、それを話すことは出来ませぬ。しかし読んだり、理解したりします。

哲学 (philosophie) とか愛知学 (wijsbegeerte) とかいはれる学問の領域や或は神学の領域も探求されねばなりません。その神学はわが国法によって禁じられていますし、それは往時デカルト、ロック (Socle), ヘーゲル、カント (Kante) などによって、確証されたものとは異っています。これを学ぶことは大変困難なようにおもわれます。しかし、私にはそれはわが国の文化に遺献すると思われませぬので、たとひ短時間によって、それを学ぶことが阻止されるとしても、私としてはその幾分でも学びたく思います。

貴方にお断りしておきたいことは、ヨーロッパの習慣に全たく不案内であって、それでその経験をもつ善意の人の誠実な助言による外、解決の道はないということです。

私は代表者として責任が重いことを知っています。それで私は貴方の御高配によるこんで服従します。これが私の真実なお願ひであります。

敬具

(敬愛をもって貴方の臣僕である)

西 周助

原物複写; J. ホフマン

1863年の夏はすぎで、いろいろの「関係者」が、授業が始められる可能性とか方法について意見の一致をみたことは明らかである。フィッセリング

教授は、ホフマン教授に次のような文書をおくっている。

敬愛する友よ

次の火曜日の夕方 6 時30分に私共の授業の始めとして、津田、西の両君と面会したく存じます。両君の住所宛名を知りませんので、恐れながら両君がそのことを覚えていただくように、貴方から両君にお願いして下さい。

匆々

S.フィッセルリング

1863年10月31日

授業はそのとき始められた。つまり火曜日と金曜日の晩が規則的にあてられている。1863年11月3日火曜日に初めの授業がなされた。

勉学の意欲の熱心さが、早くも厳しい試練をうけたのである。1863年11月17日全国に次のような記念祭典が近付いている。それは五十年まえにオランダが独立し、スハーヴェニンゲンでオレンジ皇太子が祖国の地を踏んだことを記念する大祭典である。二人の日本人は、その記念祭典に参加したいという大変な意欲をもっていったことは明らかであった。とくにヘーグにおいて、彼らはこのことについて彼らの先生に報告をしている。だが本当の東洋的な礼儀をもって、ペンで次の文を認めたのである。

1863年11月16日ライデン

拝啓

私共は次のことを先生に謹んでお報らせいたします。ヘーグで大祭典が催されるにも拘らず、明日火曜日の晩、先生の講義を他の週と同じく受けたく思います。私共にとっては見物も甲斐のあることですが、先生の授業は更に重要であります。

敬具

津田真一郎

西 周助

ラペンブルフにおける  
フィッセルリング教授先生

私共は次のことを詳細にのべることができる。つまりこの様な丁寧な形式でのべられた彼の願いは、教授によって何の結果もあたえられなかった。

講義は明らかに大変規則正しくつづけられた。つまり1865年の秋には次のことが表明された程であった。1863年につくられたプログラムは、当時の見通しで見積られた二年の期間中に完全に仕遂げられたのである。1865年11月のおわりには日本人の両君は祖国帰還の旅行を準備して企ている。このことは教師と生徒達の間次第に生れてきた厚い友情を示す文通の原因となったものである。

1865年11月27日ライデンにて

拝啓

今や政治学についての私共の学習は幸いにも終りとなりました。その政治学によって、私はヨーロッパ的学問の二三の概念や知識を得たのであり、ヨーロッパにきた私の目的が達せられたので、それに対して先生に心からの限りない感謝をいたします。

上に述べた学問は、わが日本で都合よく受け入れられ、私共の先生と私共生徒の間の友情のみならず、ヨーロッパ列強と日本国との友好関係が大いにかためられることを望んで、私は祖国に帰ります。このような固い友好関係を大いに望んで、私は更に先生に一枚の私の写真と二つの花瓶<sup>(1)</sup>を謹んで差上げたく存じます。それは、大いなる尊敬をもって、友情と愛情のご挨拶をする者の記念としてであります。

敬具

津田真一郎

追伸、日本の絵などを御令息方に進呈いたします。

註(1) これは写真と一組花瓶をさしている。hはvとして発音されねばならない。日本語ではvを見分けることが出来ないからである。その語感にしたがえば、Paar(組)という語の添加は、ここでは偶数が意味されていることを示していた。

フィッセルリング教授の返事は、津田の書いた手紙を受けとったあと二十四時間内に、次のように

認められている。

1865年11月28日ライデン

津田真一郎君

西 周助君

ほぼ二年前に、こちらに渡来する日本人に、ヨーロッパの政治学の教育の委託をすすめられたとき、私はその申込みをまったく躊躇なくうけとったのであります。

私は種々困難と闘わねばならないと予めいつていました。つまりそれは、私がおの人達に語る言葉についての私の生徒たちの不慣れとか、彼らが育ったところの、ものごとの意味や考え方がヨーロッパ民族のもの大いに相違していることか、我々が互に他の点においても理解できないかも知れないということなどです。

だが、そのことをいづれにしても試みてみなければならぬと思いました。任務自体が私には大変名誉でありました。つまり日本とヨーロッパ諸国の関係が次第に広範囲になってくるにつれて、ヨーロッパで次第に重要性をましている国の、二人の著名な人と特別な知り合いになるでせう。ヨーロッパの学問の原理を、日本に注入するために協力することによって、おそらく有益な仕事が出来ると思っています。オランダと日本の間に昔からなされていた友好関係をさらに固くつなぐために、この私の義務を辞退したくないと思いました。

このような考えで申出された仕事を受けることに決心したのです。今やその仕事も終りにおよんで、私は充分な喜びをもって、二年ごしのこの仕事を振りかえてみています。恐れていた困難は、我々が互いに直接知り合いになってから、すみやかに消えました。我々はあらゆる点においてすぐさま完全にお互いに理解し合うようになりました。生徒の貴君たちが大いに熱心な知識欲に充ちているばかりでなく、また理解と聡明な判断力を持ち、高潔な感情をもちあわせていられることを見ました。私の教育が良き実りをもつとい

う確信をすみやかに得たのです。

かくして、多くして長い晩の集いが私には全ったくの喜びの時間となりました。そしてそのことが今や終りをつげたということは、私にとって名残り惜しいことであります。

私は、貴君らの中に、熱心で親切な生徒ばかりでなく、友人を見出したので、とくにそのことを名残り惜しく思います。我々は、お互に礼儀と尊敬をもって会合したばかりでなく、我々の間には真実の愛情が生まれました。生きている限り、この愛情は最もこころよき思い出となって残るでしょう。

お別れの時が来ましたので、貴君が私と私の家族にかくも多くの跡をのこした愛情と友情を心から貴君らにお礼を申します。

同時に、私の友人である貴君らの最後の船旅が安らかならんことを祈ります。

どうか速かにご無事で貴君の祖国にかえって貴君の友人やご家族の方のところにおかえり下さい。

どうか勇氣と力をもって旅だち、私の指導のもとに貴君らが準備された勉強の分野をご見察して下さい。

貴君らが慰めあっていた大きな犠牲についての十分な満足をしたのしんで下さい。貴君らの目の前の大きな目的、つまり、貴君らの国の学問的進展が、それによって国家の秩序と法の確立となり、又国民の繁栄の促進となり、次第に多くの実証をうる程になってほしいものです。

それでは、どうか貴君の家では仕合せに、祖国では有益な人となり、貴君の社会で栄えあるものとなられるように。

そして、その際貴君らのオランダ滞在や我々の語らいや、貴君がここでえた友人に対して、友情ゆたかな思い出がいつまでもあるように。

これからいつまでもつづく最大の尊敬と真実の愛情をもっていただくことを確信して下さい。

敬具

S.フイッセリング

帰国の旅に出発して、日本人の両君の各々は次の文面で短い報告をしている。

1866年2月6日江戸

フィッセリング教授殿

私の尊敬する先生

1866年2月12日に横浜まで無事旅をおえたことを謹んでお報せいたします。

1865年12月2日 ロッテルダムから出発して、その後ブリッセルで二日、パリで十一日いて、十六日にマルセーユに到着しました。先生のご親切なお便りにより、我々はアルマ様と良き知り合いになりました。二日の後12月19日に南 (said) マルセーユの岸をたちました。船の中で三人のオランダ人がいて、多くの点でその人らの援助をうけました。アレキサンドリヤに着いたとき、そこにとどまらないで直ちに鉄道で行きました。そしてそれでアレキサンドリヤの領事のところで友情のこもったお便りをお送りすることが出来ず、甚だ失礼いたしました。二十八日にスエズから出発して、1866年1月2日にアデンに着き、13日にボワン・デ・ガルに21日にはシンガポール、26日には西貢2月1日には香港、6日には上海、12日には横浜、そして同日の夜江戸に着きました。旅行中は嵐にもあわず、船酔いもなく、それで酷暑のもとで、楽しい日をおくりました。家に到着したとき、慶ばしいことには、家族全部が健在でありました。

友達らの所望や好奇心で現在毎日のように大変多忙な日をおくり、朝から晩まで友人の訪問は間断することがありません。そのためこの手紙で委細なことについてお報せすることが出来ません。ですから、そのことは次にお便り差し上げるときまで延ばしたく思います。ただ私は、筆舌に表わすことが出来ない感謝の言葉をつけ加えなければなりません。ライデンに滞在したとき、先生の個人的なご高配は、先生の尊敬すべきご教督ばかりでなく、ご厚意に充ちたご親切によって、私の心には忘れがたい刻印となりました。以上の理

由で、私はまだ自分の仕事を始めていません。ご令室、ご令息、ご兄弟に宜ろしく。ご令室が家内へ下さいました贈物について、家内は心から感謝しています。そして家内からも宜ろしく申しています。

愛と尊敬とをもって、いつまでも先生の従順な生徒である、

西 周助

1866年3月9日江戸

先生

ここに2月12日に江戸に無事到着したことを謹んで先生にお報せします。私は、我々の教育制度をさらにヨーロッパ方式によって改善しなければならぬことを拜命しました。それで私は、先生からうけた教育を生徒に授ける機会をこの短い期間もつことと存じます。それによって、出来るだけ広くわが国民にヨーロッパの思想を広めることをのぞみ、またそのように努力します。

先生が私にお便り下さるときには、フラーヘンハーゲにいる日本人、たとえば内田恒次郎氏にどうかお渡し下さいますように。それとも直接に横浜の税関に宛てて下さい。

ご令室に宜ろしく。そして家内が先生に宜ろしく、そして先生の贈物を感謝しています。最も尊敬をもって、先生の忠実な僕である、

津田真一郎

フィッセリング先生

その間に分遣隊長、内田恒次郎は、なおヘーグにのこっていた。彼は次の手紙でとりあげる事柄について、もう一度ホフマン教授の仲介の労を願っています。

「写し」

1866年9月26日ヘーグ

教授先生

この月の17日の先生のご芳紙によって、先生とご相談したことについてさらによく考慮いたしましたところ、先生のご高配によって、フィッセリング教授に、300 ギルダーの金額



を謝礼としてお渡ししたいと存じます。さらに同封の日本の贈物は、津田氏と西氏が、休暇になって先生の教育を受けた時間に対してなされたものであります。

同時に私は先生にお願いして、上記の者らがライデンに滞在している間、うけたご尽力に対してわが政府から、フィッセリング教授に喜んで感謝の意を表わしたいと存じます。

頓首

内田恒次郎

追伸 この一つの箱の中には、二つの漆塗りがあります、そして八枚の絹のビロードが送られています。

ホフマン先生

原物複写す

J. ホフマン

ホフマン教授は、この手紙を1866年10月2日付の同封した彼の手紙と共に転送した。

1866年10月2日ライデン

愛する友よ、

四日不在のあとで、昨日私宛の内田氏の手紙がまいりました。300 ギルダールの小切手と、さらに物が入っている一つの箱もそうです。私はこれら二つのものを貴方に送ります。

(箱は勿論あけないままです)

草々

J. ホフマン

フィッセリング教授殿

フィッセリング教授は、1866年10月2日のホフマン教授の手紙に対して、10月18日の手紙でもって次のように返事している。

ライデンにおける  
ホフマン教授殿

1866年10月18日ライデン

拝復

私は、貴方のご芳紙と、300 ギルダールの銀行小切手、その上内田恒次郎氏が私に送るよう

に望んだ一つの箱の日本の贈物も共に無事落掌致しました。

私にとって慶ばしいことは、内田氏が貴方に求めた「津田、西両君がライデン滞在中に受けたご尽力に日本政府が私に謝意を表わす」ことでもあります。

私に贈られた美しい贈物を、私に対する日本政府のご鄭重なご旨意のあらわれとして、感謝をもってお受けいたします。貴方にお願ひすることは、内田恒次郎氏を鄭重にお招きして、日本政府に対する私の謝意を述べたく存じます。

しかし乍ら、300 ギルダールの金額を受けとることは出来ません。この金額は休暇のとき津田氏と西氏の教育に対して謝金として私に内田氏が提供したものでありますが、私は決して規定された時間に対して決った謝金のために、日本の方々と契約をしなかったのであります。

それで私におくられた300 ギルダールの銀行小切手をここに再び同封しますが、どうか貴方が内田恒次郎氏にこの理由をのべて、お返し下さるようお願い致します。

敬具

S. フィッセリング

内田派遣隊長は、すでに1866年10月22日の手紙でフィッセリング教授に、今直接に面談するための機会をこの時見出している。以下はその文通の内容である。

1866年10月22日ヘーグ

謹啓

9月26日にホフマン教授のご配慮によって、ライデン滞在中貴方が津田、西両君のために、悦んでなされた政治学のご教授に対して、謹んで貴方に日本政府からの謝意を示すことになりましたので、私はただちに先生にお礼の言葉をのべる、慶ばしい務めをもっていきます。二人の同国人が貴方のところで、かくも広範囲に習得した知識がわが国の救いとして役立っていることは、敬意を示すもの

光栄として希求するところであります。

博学なる教授殿の僕である、  
内田恒次郎（日本語で署名）

オランダ駐在 日本派遣隊長

フィッセリング教授殿 侍史

66年10月23日

その後すぐ翌日にフィッセリング教授は内田隊長に返事を送った。

その写し

内田恒次郎閣下

ヘーグ駐在武官日本派遣隊長

1866年10月23日ライデン

閣下

昨日の貴方のご芳紙を落掌いたしました。私が津田・西両氏になした教育に対して大変ご鄭重な謝意をお示し下さいまして、まことに有難うご座いました。このことに依って、ホフマン教授のご高配により、日本政府から受けるご好意のしるしは、すでに以前において、まことに十分なものであります。

私に提供された高価な贈物は、私に委任された光栄ある務めに対する慶しき記念と存じます。

以前津田・西両君を最も十分に教育したという保証をここで附言することは出来ません。両君が特別の興味と熱心さでもって教育に従ったことを経験したばかりでなく、私もまた絶えず両君と最大の友情のちぎりをかわしました。両君の純潔で、高貴な性格によって、両君は私の尊敬と愛情をからとりました。そして私は、全たく哀惜の心をもって、両君が出発するのを見送った訳であります。

ここで貴方の祖国の救いにまで両君が仕上げた知識が役立つように、貴方と共に願う次第であります。私は、そのとき、そのために幾らかでもなし得たことを幸いと思っています。

大いに尊敬をもって

ライデン大学教授 フィッセリング

この二つの手紙は誇張のない礼儀正しい調子でかかれたものの模範であり、読むためにそれを受けとったホフマン教授にも、フィッセリング教授に対して、1866年11月5日付けの手紙をかく機会となった。

1866年11月5日ライデン

愛する友よ

私は大変満足して内田氏の手紙を拝見し、それに貴方からおくれた立派なご返事に感心しています。私は保存に備する二つのものを感謝をもって、貴方に返送します。

さらに、少なからず驚かされたのですが、貴方の贈物には格別の感謝をおぼえます。貴方はいくらか考えにくかったかも知れませんが、それがわれらのシラーの美しい肖像よりもヨリ好しく、またヨリ価値のあるものであるということです。このようにして、私にとっては、今もなお貴方の名がシラーの肖像に結びついています。

匆匆

ホフマン

フィッセリング教授殿

ここに記されている日本人の来遊は、オランダにおいて軍艦の建造のことについて知るための派遣隊の派遣とならんで、いうまでもなく日本とオランダの間にすでにかよっていた美しい友情に寄与したのである。この来遊は、今日の科学日本にとって、近代日本における学問の研究をかくも高い水準にまでたかめるための最初の先駆者であった。

内田派遣隊長の隊員のうちでは、特別な人達、たとえばのちほど日本で大きな役割を演じた榎本もその中にいた。曾って榎本は、天皇の政府にはげしく衝突したことがある。このことは殆んど榎本の生命を賭した程のことであった。のちほど事件は解決して、榎本は聯合艦隊司令長官の地位にまでなった。赤松は、著明になったもう一人の将校である。

西と津田両氏は、のちほどその国で高い地位に召された。津田は元老員の一員である、つまり元老会議員であり（国会議員といっている）また天

皇の枢密顧問となった。そして若し記憶に誤りがなければ、西氏は高い爵位を授けられた。

日本では今新しい天皇の即位の御大典がなされている。この重要な時機にあって、このような事実を歴史の中から拾いあげること程敬意と興味を表わすことがありえようか。その事実というのは、うち消し難く示されているものであるが、数世紀以来極東の立派な国と、冷血といわれるような寒くて小さい国（西欧北部にある）との間に、

偉大で真実に充ちた友情が生れたということである。そしてその国は、生存の大部分を航海に負っていて、それで数世紀間かくも容易に遠距離による困難を克服することが出来たほどである。日本が新しい統治者のもとに祝福に充ちた未来を迎えることを願い、またオランダが小さくはあるが、多年変らざる友として、日本の繁栄を満足しているつまでも見守ることを願う次第である。

1928年11月5日 アムステルダム